

二〇一八年度入学者選抜試験問題

国語

(六〇分)

問題はⅠからⅢまで(16ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私は、欧米の文化を「自己中心の文化」、日本の文化を「間柄の文化」と名づけて対比させている(榎本博明『みっともない』と日本人』日経プレミアシアリズ)。

「自己中心の文化」とは、自分が思うことを思う存分主張すればよい、ある事柄を持ち出すか持ち出さないかは自分の意見をキジユンに判断すればよい、とする文化のことである。常に自分自身の気持ちや意見に従って判断することになる。

① 欧米の文化は、まさに「自己中心の文化」といってよい。そのような文化のもとで自己形成してきた欧米人の自己は、個として独立しており、他者から切り離されている。

一方、「間柄の文化」というのは、一方的な自己主張で人を困らせたり嫌な思いをさせたりしてはいけない、ある事柄を持ち出すか持ち出さないかは相手の気持ちや立場を配慮して判断すべき、とする文化のことである。常に相手の気持ちや立場を配慮しながら判断することになる。

日本の文化は、まさに「間柄の文化」といえる。そのような文化のもとで自己形成してきた日本人の自己は、個として閉じておらず、他者に対して開かれている。

こうした日本的な自己のあり方に対して、欧米かぶれの人たちは主体性がないなどと批判的なことをいう。だが、自己主張を適度に抑え、相手をソソ<sup>②</sup>ンチョウしようという、個として凝り固まらず、他者に対して開かれた姿勢が、争い事の少ない調和的な社会を生み出しているのである。

そして、そうした姿勢こそが『おもてなし』の精神につながっているのである。

このように、私たち日本人は、どんなときも自分本位にならずに、相手の立場や気持ちを考えないといけない。そのように文化的に条件づけられている。それが言語表現の習慣にもあらわれているのだ。

日本語を学ぶ外国人からよくいわれるのは、日本語には曖昧な表現があるから難しい、ということである。

欧米人もアラブ人も、自分の思うことをはっきりいい、自分の要求をはっきり主張することに慣れているため、当然のように、そういった表現をするのだが、それは日本語にすると失礼な物いいになったり、相手にとってきついいい方になったり、ずうずうしいいい方になったりする。

<sup>3</sup> 学校でディベート教育が取り入れられ、自己主張的なコミュニケーションの練習をさせられている今の若者たちでさえ、話し合いの場で自分の意見を主張するのが苦手な者が多い。

学生に聞いても、グループで話し合うワークを取り入れる授業で、よく知らない人たちに対して自分の意見をいうのは難しく、ごく一部の人が話しているだけで、他の人は適当にお茶を濁している感じだという。

なぜ、よく知らない人に対して意見をいうのが苦手なのか。それは、相手の考えや感受性がよくわからないため、配慮するに失敗するかもしれないからだろう。

**A**、自己主張の教育を受けている昨今の若者でさえ、若者特有の今風の婉曲表現を用いることで、相手のことを配慮し、傷つけたり衝突したりするのを避けようとしている。

友だち相手の場合でも、日常的に相手を配慮して、ぼかした表現を使う。

**B**、音楽の話をしているとき、

「私、それ好き」

といわずに、

「私、それ好きかも」<sup>4</sup>

とぼかすような表現を使ったりするのも、それが嫌いだったり、別の曲やアーティストが好きだったりする友だちを配慮してのことである。

日曜日に何をして遊ぼうかという話をしているときに、

「映画を観たい」

とはつきりいわずに、

「映画とか観たいかも」<sup>5</sup>

といったりするのも、他のことをしたい友だちがいるかもしれないからである。

日本語を学ぶ外国人を悩ます婉曲表現にこそ、いかにも日本らしい気遣いの心が反映されているのである。

日本語論を専門とする芳賀<sup>はが</sup>綾<sup>あや</sup>は、つぎのような事例を用いて、日本人の言語表現の微妙なニュアンスを描写している。

「バスの中で、旅行者らしい中年女性と土地の人らしい青年が並んで掛けていた。考え事でもしていたのか、女性は乗り過<sup>り</sup>ごしそうになり、気づくやあわてて降りようとした。その背中へ、後に残った青年がちよつとためらいながら声をかけた。

『アノ、これ、違うんですか?』<sup>6</sup>

女性は席にカバンを一つ置き忘れて降りようとしたのだった。——青年の発話に、相手の呼称も、代名詞も、出現していないのがおもしろい。『小母<sup>おぼ</sup>さん!』とも『あなた!』とも呼べず、『アノ、』となった。そして『小母さんのカバン』でも『あなたのカバン』でも落ち着かない。『これ』ですますことにした。英語なら your bag と言うのに何の迷いもあるはずがない(芳賀綾『日本語の社会心理』人間の科学社)

芳賀は、年齢・性別・親疎など、いくつもの条件を考え合わせたあげく、使う語句を決定しかねると、このような結果になる、そして、どの語句を選んでも、照れ臭さが絡んで口に出せないという心理の微妙さこそ、日本人の対人行動を描くのに欠かせないとしている。

**C**<sup>④</sup>、そこにこそ日本語とそれを用いる日本人の心の微妙なセンサイ<sup>③</sup>がある。このような描写は、日本語を学ぶ外国人の頭を大いにコンラン<sup>④</sup>させるに違いない。でも、日本人ならこの青年がこのような方をせざるを得なかった気持ち

よくわかるはずだ。

丁寧語とはいえ、年長者に「あなた」と呼びかけるのは失礼に当たるといった感受性が広く共有されている。そうかといって「君」とか「お前」などというのは、あまりに不適切である。

知っている相手なら「〇〇さん」と呼びかければよいのだが、名前を知らない相手に対して呼びかけるのに適切な代名詞がない。そこで、「小母さん」という表現が頭に浮かぶが、もしかしたら気分を害するかもしれない。そうかといって「お姉さん」というには年を取りすぎていて嫌味になる。こうした葛藤を経て出てきた言葉が、「アノ、」だったというわけだ。

考えてみれば、私たちはよく知らない人に声を掛けるとき、「あの……」とか「すみません……」と呼びかけることが多いが、そのようなちょっとした呼びかけのハイゴで、こんな葛藤が渦巻いているのである。

そこにあるのは、相手がどう感じるだろうか、うっかり傷つけないだろうか、気分を害さないだろうか、失礼にならないだろうか、といった相手の気持ちを気遣う心なのである。

日本語の「すみません」には、謝罪の意味だけでなく、感謝の意味も含まれている。だから、人に謝るときだけでなく、何か親切にしてもらったときも、私たちは「すみません」と口にする。

実際、日常生活では、謝るよりも感謝の気持ちをあらわすために、「すみません」と口にする人が多いのではないか。それに対して、感謝の気持ちをあらわしているのだから、謝罪のときと同じ「すみません」というのはおかしい、「ありがとう」というべきだ、などという人がいる。英語でも、感謝の気持ちをあらわすのに「エクスキューズ・ミー」や「ソーリー」といった謝罪の言葉は使わずに、「サンキュー」という。だから、日本語でも「ありがとう」というべきだ、というのである。

**D** 何という見当違いなことをいい出すのかと呆れざるを得ない。日本で日本語を使って暮らしているながら、日常用語のもつ文化的含意をまったく理解していない。

私たち日本人の場合、感謝の気持ちをあらわす際にも、なぜ「すみません」という言葉が自然に口をついて出るのか。そこに

は気遣いの心が作用しているのである。

「ありがたい」というのは、あくまでも自分の都合である。自分が「ありがたい」というだけで、相手が労をとってくれたことや負担を負ってくれたことに対する気遣いは、そこにはない。あくまでも「ありがたい」という自分の立場でものをいっているであり、自分中心の発想である。

それに対して、「すみません」という言葉には、「ほんとうに申し訳ない」という、相手の立場に対する思いが凝縮されている。「すみません」は、労をとってくれたことや負担を負ってくれたことに対する気遣いにより発せられる言葉であり、相手に対する思いやりに満ちた言葉なのである。

ゆえに、感謝の意をあらわすのに、「自己中心の文化」なら「ありがとう」で足りるが、「間柄の文化」では相手を気遣うことが必要であり、「ありがとう」では足りない。そこで「すみません」が用いられるのである。

(榎本博明『おもてなし』という残酷社会 過剰・感情労働とどう向き合うか』による)

問一 —— 線部①～⑤のカタカナを漢字に改めよ。

問二 空欄 A 〽 D に入れるのに最も適切

なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア さらに イ まさに

ウ いったい エ たとえば

問三 —— 線部1「閉じておらず」とあるが、この「閉じる」

は、ここではどういう意味で用いられているか。これ

より前の本文中の語を用いて五字以内で答えよ。

問四 —— 線部2「言語表現の習慣」とあるが、具体的にど

のような「言語表現」を指しているか。答えよ。

問五 — 線部 3「学校でディベート教育が取り入れられ、自己主張的なコミュニケーションの練習をさせられている今の若者たちでさえ、話し合いの場で自分の意見を主張するのが苦手な者が多い」とあるが、筆者は、その理由を何だと考えているか。答えよ。

問六 — 線部 4、5にみられるような、日本語の「かも」にはどのような意味が込められていると筆者は考えているか。説明せよ。

問七 — 線部 6「アノ、これ、違うんですか？」とあるが、なぜこのような言い方になったのか。筆者の考える、その原因に当たる部分を本文中に七十字以内で探し、初めと終わりの五字ずつを抜き出して答えよ。

問八 — 線部 7「感謝の意をあらわすのに、『自己中心の文化』なら『ありがとう』で足りるが、『間柄の文化』では相手を気遣うことが必要であり、『ありがとう』では足りない」とあるが、筆者の考える「ありがとう」と「すみません」の意味をそれぞれ説明せよ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

高校生の「私」(中溝早希)は中学時代ソフトボール部のエースで、強豪校への推薦が決まっていたが、肩を壊して辞退し、この高校に入學した。「御木元玲」は音大附属校の受験に失敗し、やはりこの高校に進学した。それぞれがそうした経緯はだれにも話さずに高校生活をおくっていた。

私の肩が壊れたとき、母は泣きに泣いた。そんなに泣かれたら私の立場はどうなるのか、母はやはり考えもしないようだった。自分が泣きたいばかりで、当の娘には泣かせてもくれない。結局のところ、私のソフトボールも自分が楽しむ道具でしかなかったのだろう。

高校に入っても、母はあの頃のままだ。私に過剰な期待をかけていた母、それを忘れられない母、娘を氣遣っているつもり  
の母。あなたはまだまだ若いんだから、と理解あるようなことをいう母。彼女はさんざん泣いた後で、さっぱりと晴れやかな顔で  
いったのだ。

「あなたは若いんだから。まだまだこれからなんだから」

あぜんとした。励ましているつもりだったらしい。でも、これから何だというのだろう。これからはもうない。母にとって  
は楽しみのひとつでしかなくても、ソフトボールは私のすべてだったのだ。そんな言葉はなくさめにもならないってことがこ  
の人にはわからないのかと思つたら、気持ちちは冷え切つた。

「まだまだこれからもこんな人生がずっと続いていくのかと思うと、ここらで降りたくなるね」

吐き捨てるようにいうと、母は息を呑んだだけで何もいい返せなかった。まだまだこれから鬼が出るか蛇が出るか。娘にそ  
れぐらいのことがいえないでどうする。



翌日、家庭科室へ移動する途中でポーズに呼びとめられた。

「中溝、今日、ちよつと寄っていかないか」

大きな声だった。まわりの子が怪訝<sup>けげん</sup>そうな顔で振り返っていく。私だって怪訝だ。このポーズは古典の教師のくせにはன்றいもしんみりもしておらず、現れればいつでもこちらの都合などおかまいなしにいいたいことをいう。

「寄るってどこにですか」

彼はにやりと笑った。

「グラウンドに決まってるじゃないか」

「どうして」

聞き返したとき、はっとした。ポーズは何か知っているのではないか。

「中溝、いつもグラウンド見てるよな。堂々と寄っていけばいいんだよ。おまえ足速いし、走りたいんだろ」

「見てません」

何いってるんですか、と笑ってはぐらかしたってよかった。それなのに、思いがけず強い口調で否定した自分に自分で驚いていた。ポーズは人懐っこい笑顔を崩さず、うんうんと何やらうなずいて歩いていってしまった。

まったく大人げないと自分でも思う。何が余生だ。余生ならもつと穏やかに対応できたはずだ。級友たちが何も見なかったみたいにさざめきながら歩いていくほうに目を遣ると、御木元玲がはっきりとこちらを見ていた。一瞬合った視線を外し、後ろから追いついてきたコリエに私は耳打ちした。

「むかつく」

ポーズが、なのか、御木元玲が、なのか。もしかするとこんなことで揺さぶられる自分にいちばんむかついているのかもしれない。コリエはさっと御木元玲に視線を走らせてから、

「どうしたの、なんかあったの」

と面白そうに聞いた。

どうして御木元玲にむかつかなくちゃならないのか自分でもわからない。わざわざ **A** の敵にするほどの子ではない。それほど関わりのある子じゃないし、それほど嫌な子でもない、はずだ。人に歩み寄ろうという姿勢のない、鈍感で、幼くて、傲慢で、気取ってて、いけすかないやつではあるけれど。

母親は有名なヴァイオリニストだそうで、御木元響？ それ誰？ と聞いた私は **B** を買った。自分でいうのもなんだけど、私にはおかしいほど一般教養みたいなものがない。朝から晩まで白球を握っていて、そんなものを身につける暇——といったら怒られそうだけ——がなかった。

彼女はきつと父親が外国人なんだろうと思わせるエキゾチックな顔立ちをして、長い黒髪を後ろでひとつに束ね、つねに不機嫌な顔をしている。ほとんど喋らず、笑いもせず、いつも独りである。私がむかつこうがどうしようがきつと気にもしていないだろう。

ただ、合唱コンクールで何かが変わった。指揮に指名されて彼女が初めてこちらを振り返った。同じクラスになって半年余り経ったあのときになってようやくその目にクラスメイトの顔が映ったみたいだった。私も、彼女の不機嫌じゃない顔を初めて見た気がする。不機嫌ではなく——なんとというか、ぐるぐるとかがつがつか、そういういろんな感情をむきだしにしたような、生々しい顔だった。

「……そうか」

コリエが私を見て、ちよつと首を傾げる。

「早希、ヘン。何ひとりで納得してるの、むかついたのはどうしたのよ」

「なんとなく、むかつく理由がわかった気がする」

「あたしにはわかんないよそれじゃ」

私にもよくはわからない。

なんでこんなことをやってるんだろ。そう思ったけれど、ついつい足が向いてしまった。気づくと私は音楽室の前で息を殺していた。

ひとつには、グラウンドを避けたいという気持ちもあった。いつのまにかソフトボール部を見ていたなんて、さらにそれをポーズなんかに見破られていたかもしれないなんて、ほんとにかっこわるい。寄っていかないかと誘われて、それをまるで気にしないかのようにグラウンドの脇を通って帰るのはむずかしそうだった。無視して通り過ぎることならできる。だけど、ポーズに、おーい、と声をかけられたら、昼間みたいにムキにならずに断ることができるだろうか。スポーツに興味はありませんと穏やかに笑って話せる自信はあまりなかった。

だからといって音楽室<sup>4</sup>に来る理由にはならない。

千夏、だろうか。それもある。千夏がおずおずと、でも明らかに **C** を弾ませて紙袋から出して見せた肌色のテキストが、目に焼きついている。それを使って何が行われるのか、ひとりの同級生をあんなふう<sup>5</sup>に夢中にさせるのは何なのか、見てみたい。そう思ったのはほんとうだ。——わかっていた。わざわざ音楽室を覗く<sup>のぞ</sup>ようなことをしているのは御木元玲のせい<sup>6</sup>に違いなかった。千夏を音楽室に引き寄せているのも彼女だ。私の中でぐるぐるが渦を巻いている。御木元玲の正体をこの目で見たい。その欲求を抑えられなかった。

音楽室の中からは何も聞こえてこなかった。合唱部の練習が講堂で行われる水曜日に、浅原の許可を得て音楽室を使わせてもらっている、と千夏は史香に話していたそうだ。そして今日、放課後に千夏がいそいそと音楽室のほうへ向かうのを見た。この中にいるのは確かなはずだった。何をしているのだろう。どうして何も聞こえないのだろう。

そう思ってもう一步ドアに近づいたときだった。内側から、すっとドアが開いた。

あれ、と声が出た。驚いたような顔の千夏が立っている。

「どうしたの」

先に私が聞いた。千夏のほうがこそ余程そう聞きたかったことだろう。

「今、練習始めようと思ったたらこっちで物音がしたから、誰か来たのかなと思って。吹奏楽の子とかときどき楽器取りに来たりするから」

「そんなんでいちいちドア開けに来るの。もっと堂々としていればいいじゃない」

「あ、そうだね、ごめん」

なぜか千夏が謝っている。私の態度がそれだけ偉そうだということだろう。偉そうついでにいった。

「練習、見ていてもいい？」

千夏はピアノのほうを振り返った。そこで私は千夏以外にも人がいたのかと初めて気がついたふうに顔を向けた。御木元玲はピアノの前の椅子にすわっていた。彼女は立ち上がり、そのまますぐ私の前まで歩いてきた。

「見ていだけじゃなくて、一緒に歌っていけばいいのに」

べ、と私は口籠もった。べつに、歌いたいわけじゃない。でも、べ、しかいえずに口を噤んだ。御木元玲の口調はあまりにも自然だった。

何もいえずに立っていると、彼女はまたピアノのところへ戻っていく。千夏が弾むような足取りで後を追った。どうしようかと思っているうちに、ピアノが鳴り始めた。これが、<sup>\*</sup>コールユーなんとかだろうか。ドアを閉め、ゆつくりとピアノのほうへ近づいた。聞いたことのある曲だと耳を傾けていると、やがて千夏が歌い出した。のびのびと楽しそうに。どんな名曲かと思えば、うちの校歌じゃないか。へえ、と思う。退屈な歌だと思っていたけど、こうして聴くと案外いい。

校歌を歌うことがどんな勉強になるのか知らない。御木元玲は千夏の歌いたいように歌わせて、自分は流暢にピアノを弾いているだけだ。それなのに、ちよつと楽しそうだった。千夏5のあんまりうまくない歌が私を誘う。なんとなく私まで歌い出したくなる感じなのだ。

やがて歌が終わると御木元玲のピアノも鳴りやんだ。校歌の余韻が音楽室に残っている。

「私、歌を歌おうにも楽譜も読めないから。声の出し方も知らないし。そしたら御木元さんが、まずは好きな歌を歌おうって」  
千夏が小声で説明してくれる。

「それで校歌？」

「うん。この学校に来てよかったな、って思うから」

そうか。そんな人もいるのか。この特に取り柄のないような学校に来てよかったと愛着を感じる人を間近に見て、驚くと同時にちよつと恥ずかしくなった。成り行きで入っただけだから、もう余生だから、学校は適当に出ておけばいいと思っていた。

「週に一度、御木元さんに教えてもらって、あとは自分でなんとか——」

「教えてないよ」

御木元玲がきつぱりという。

「伴奏するだけ。ときどき一緒に歌うだけ」

「でもそれだけですつごく歌いやすくなるんだ」

千夏が熱っぽく語るのを、質問で遮った。

「あとは自分でなんとか、どうするつもりなの」

「だからさ、自分でも練習して、もしちゃんと歌えるようになったら、合唱部に入ろうかなって」

照れくさそうに千夏はちよつと俯うつむいた。おいおい。声に出しそうになって危うく言葉を飲み込む。ずいぶん小さい目標じゃないの。しかももう二年の冬だつていうのに今から入部するつもりなのか、このおめでたい同級生は。

あきれているはずなのに、胸がじんとしている。千夏の素直なパワーはどこから来るんだろう。もしかして、この子にはぐるぐるはないんだろうか。いや、と私はブレーキを踏む。たぶん、ぐるぐるのない人なんていない。それを忘れちゃいけない。ぐるぐるぐるぐる、きつと悩んでいる。楽譜が読めないというのがほんとうだとしたら、ずいぶん勇気が要ったことだろう。同級生に初歩から歌を習うなんて。これから合唱部に入ろうなんて。そういう気持ち、すごいと思う。余生じゃないんだ。

今も現役でぐるぐるどろどろがつがつしている人が、なんだか光って見える。自分は降りてしまったはずなのに、そういう人の匂いを嗅ぎ分けてはむかついていた。

認めなくてはいけない。余生ではない、本道を生きている人に嫉妬していたことを。

(宮下奈都『よろこびの歌』による)

【注】 \*ボーズⅡソフトボール部の顧問。

\*コールユーなんとかⅡ「コールユーブンゲン」。合唱練習曲。

問一 ——線部1「母はあの頃のままだ」とあるが、「私」は

母のどのような点を「あの頃のままだ」と感じているのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 「私」の高校生活が、輝かしいものになると信じて疑わないこと。

イ 「私」の気持ちに関係なく、母自身が思うようにしか理解しないこと。

ウ 「私」の気持ちを思いやりすぎて、過保護なくらい気を遣っていること。

エ 「私」の高校生活は、「私」の思うようにすればいいとあきらめていること。

問二 ——線部2「思いがけず強い口調で否定した自分に

自分で驚いていた」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 今は余生だと思っていたが、その本心を予想外の他人からも指摘されたから。

イ 今は余生だと思っていたが、それを認めたくない自分がいたことに気付いたから。

ウ 今は余生だと思っていたが、改めてやはりその通りだということを確認できたから。

エ 今は余生だと思っていたが、まったく周囲からはそう思われていないと知ったから。

問三 空欄 **A** **C** に入れるのに最も適切

なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア 肩 イ 口 ウ 腰

エ 耳 オ 胸 カ 目

キ 苦笑 ク 失笑 ケ 微笑

問四 — 線部 3「彼女は初めてこちらを振り返った」とあるが、これは「御木元玲」がどのように変化したことを表しているか。説明せよ。

問五 — 線部 4「音楽室に来る理由」とあるが、「音楽室に来る」本当の理由は何であったのか。説明せよ。

問六 — 線部 5「千夏のおんまりうまくない歌が私を誘う」とあるが、「おんまりうまくない歌」なのに「私を誘う」のはなぜか。その理由を説明せよ。

問七 — 線部 6「自分は降りてしまったはずなのに、そういう人の匂いを嗅ぎ分けてはむかついていた」とあるが、その理由を「そういう人」とはどのような人かを明らかにして説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

輔親は、庭に毎朝やってくる。鶯の鳴き声を聞かせようと歌人たちを招く計画を立てた。そのため、家来には鶯を逃がさないようにと注意しておいた。本文はその続きである。

\*辰の時はかりに、時の歌よみども集まり来て、いまや鶯鳴くと、うめきすめきしあひたるに、さきざきは巳の時ばかり、必ず鳴くが、午の刻の下がりまで見えねば、「いかならむ」と思ひて、この男を呼びて、「いかに、鶯のまだ見えぬは。今朝はまだ来ざりつるか」と問へば、「鶯のやつは、さきざきよりもとく参りて侍りつるを、帰りげに候ひつるあひだ、召しとどめて」といふ。「召しとどむとは、いかん」と問へば、「取りて参らむ」とて立ちぬ。「心も得ぬことかな」と思ふほどに、木の枝に鶯を結びつけて、持て来たれり。おほかたあさましともいふはかりなし。「こは、いかにかくはしたるぞ」と問へば、「昨日の仰せに、鶯やるなど候ひしかば、いふかひなく逃し候ひなば、弓箭とる身に心憂くて、神頭を上げて、射落して侍り」と申しければ、輔親も居集まれる人々も、あさましと思ひて、この男の顔を見れば、脇かいとりて、いきまへ、ひざまづきたり。祭主、「とく立ちね」といひけり。人々をかしかりけれども、この男の気色におそれて、え笑はず。一人立ち、二人立ちて、みな帰りにけり。興さむるなどは、こともおろかなり。

〔十訓抄〕による

【注】

\*辰の時 午前八時頃。

\*うめきすめき 歌を詠もうとして苦心する。

\*巳の時 午前十時頃。

\*午の刻の下がり 正午過ぎ。

\*この男 ここでは、「家来」をさす。

\*とく 是やく。

\*帰りげに候ひつるあひだ 帰ってしまいそうな様子をしておりましたので。

\*神頭を上げて 神頭(先のとがっていない矢)を弓にあてて。

\*祭主 ここでは、「輔親」をさす。





